

國民道德史より觀たる本居宣長

東京高等師範學校教授 亘理 章 三 郎

國民道德を發生史的に研究すると、國民の中に發生し初めた道德意識は、一方に於ては實生活に、他方に於ては言語に表現される。こゝには主として後者、即ち道德思想史方面に就いての觀察を述べて見たいと思ふ。

上代に於ける我が國民の道德意識が如何なる進歩の程度にあつたかは徵すべき文獻が無いが、大體を云ふと、極めて優秀な發展を爲し得べき素質を具へ乍ら、而も思想としては、猶素朴・幼稚の域にあつた。其處へ恰も隣境の支那大陸から漢民族の文化が流れ込んで來た。これは正に國民道德史上の大問題である。何となれば其の流入した文化は、根本國體は勿論、民族性も歴史も全然異つた他民族の文化だからである。國民の道德思想は、民族自己の内にある固有原理に基いて自然に發達してこそ、健全なる發達を爲し得るのであるが、身に合はぬ俄仕込の借物衣裳を着たのでは固有道德思想の發展は阻礙されて、

其の弊の極まる所は遂に（一）尊外卑内に傾き、（二）心醉模倣に墮し、やがては（三）文化自失に陥るに至る虞がある。ところが支那文化の輸入以來は、我が道徳史の上に於ても、其の憂ふべき傾向が著しく現れてゐるのである。歴史の語る所に據ると、支那の儒教が初めて日本に入つたのは應神天皇の御代であるが、それが思想的に現れてゐるのは古事記の履仲天皇の卷である。今其の事實を簡單に云ふと、住吉仲皇子の叛亂の時に、官軍側の或る一人が、仲皇子近從の隼人會婆訶里に皇子を殺せと命じて、若し命の如くすれば鎮定後大臣に取立てると云つた。それで會婆訶里は榮達に心昏んで遂に主と頼む皇子を刺殺した。其の時皇太子は委細の經過を聞召して、「會婆訶里、爲_レ吾雖_レ有_二大功_一、既殺_二已君_一、是不義、然不_レ養_二其功_一不_レ謂_レ無_レ信、既行_二其信_一、還惶_二其情_一、故雖_レ報_二其功_一滅_二其正身_一」と、乃ち信を保つ爲には之に大臣の位を賜ひ、然も其の不義を罰せんが爲に斬首せられたと云ふのである。これが史典に「信」「義」等の徳目の語が現れてゐる最初の記事である。日本紀には、これよりも早く儒教道徳の語が現れてゐるが、これは編纂者の潤色で、實はまだそれ程までに支那文化の思想的浸潤は無かつたであらう。ところが其の後、奈良朝・平安朝・鎌倉・室町と時が移つて徳川時代になると、儒教は茲に全盛の勢を呈して、获生徂徠の如き、日本國民の一人を以てして而も日本人の文章には和臭があると罵り、日本に堯舜の道を體現する爲には、和腸を洗ひ去つて心から支那化してかゝらねばならぬと奇怪な事を唱へる者を

生じ、其の餘流を受けた者は、我が日本の神道や武士道の如きものは、皆儒教の片端に過ぎないとまで叫び立てた。そこで之に反抗して先づ立つたのは唯一神道の一派で、日本人は固有の我自身に活きよと唱へて國民の自覺を促したが、更に其れを強調して、純日本的な立場に立つて呼號したのが、荷田、賀茂、本居一系の人々で、中でも最も偉大なのが本居宣長であつた。

二

斯の如く純正日本に歸る事が本居翁の目的であつたから、翁は一切の儒教的徳目を排した。理論的に學説を述べることも漢意であると云つて嫌つた。そして支那的なものゝ一切を抹殺せんと期した。千幾百年の間支那酒の毒に酔つて本心を失つて居る人々は、速に解毒して清々しい大和心に歸らねばならぬと絶叫して、其の實現に力を盡した。

そこで漢意を全然濯ぎ去つたあとには何ものが残るか云ふと、それは素朴な原始的道德意識である。二元的に善神と邪神との對立を認めて、吉事は善神の支配から成り、凶事は邪神の所爲である、何れにしても神業に由つてさう成るのでとする宿命説が其處にある。故に祭祀と祈禱とに依つて、善神に幸ひされ、邪神の災禍を避けることが大切であるが、宣長も斯の如く、凡てを只神に委ねて人は晏如としてゐてよいと認めたのかと云ふに、宣長は「これ亦大なるひがことなり」と喝破して、「人も、人の行ふべき

かぎりをば、行ふが人の道にして、そのうへに、其事の成と成らざるとは、人の力に及ばざるところぞといふことを心得居て、強たる事をば行ふまじきなり。然るにその行ふべきだけをも行はずして、たゞなりゆくまゝに打捨おくは、人の道にそむけり」（玉くしげ）と言つてゐる。本居翁の道徳觀は其處から出立してゐるのである。しかし翁は他の一方で、支那風の「教」といふことを排斥して、「生物は生來的に各其の爲すべき所のものを熟知し且つ之を實行してゐる、其の上に教を強ひる必要はない。然るに人を治むるには教に依らなければならぬとするのは、人を鳥蟲以下に視るものである。所謂る仁義の類は、凡ての人が『あるべき限は自ら知つて爲すこと』である。それをしも儒教で特に厳しく教へ立てようとするのは、元來が支那は自然に治り難い國だから、聖人の道を以て強制的に統治せんとするのである。斯かる道は眞の道とは云へない。」と云つてゐるので、結局は、自然の本能のまにまに、感情のまにまに行つて、人爲的な標準に拘らないのが眞心だといふ事に成り、「皇大御國は：國も萬の國に勝れ、人の心もすぐれて、生れつきたれば、直情徑行即ち中正を得て、道は自ら備はりたるものを」（葛花）といふ歸結に達する。これでは一種の自然主義・本能主義であつて、道とは名けられない。自然のまゝならば禽獸と同じである。禽獸以上に高等な文化の發展がある所に人間の尊さがあるとすれば、其處には反省あり、自覺あり、批判が無ければならぬ。故に予は、本能的自然主義を、倫理的な自然主義まで練上げて、

始めて其處に價値ある自然主義が觀られると思ふ。ところが宣長翁は、さうした區別を考へずに、只々本能的自然主義を主張されてゐるのである。これでは倫理的立場から見てどうかと打傾かれる。

宣長翁の倫理觀が右の如きものであるとすれば、國民道德發展の上から見て、果してどんな意義を持つことになるか。これは實に重要な研究題目であるが、之を論定する爲には、宣長翁の時代に盛を極めてゐた儒教が、どんな影響を與へてゐたかを省みる必要がある。元來儒教道德の一面には、概念的な徳目を立て、之を他律的におしかぶせて強制し、人間本來の要求を無視する傾きがある。そこでともしれば形式繁褥に墮し、人間の感情・意欲を矯めて、偽善に流れることが多い。宣長翁が此の流弊に著眼して、先づ「本然に歸れ」と高調されたものと觀ると、非常に意義ある事である。誤つて形式に墮し虚偽に流れた儒教の衣を脱ぎ捨て、一旦本然の我に歸り、美しい本能の發露を價値化し、理想化する我自身の發展をせよ、と絶叫された翁の主張は、此の意味に於て甚だ力強いものがあると思ふ。

其の他國民道德の徳目かから考へると、宣長翁は外來思想に囚れた考へから實に痛快に日本人を解放してゐる。三種の神器に關する説の如きも其の一つである。三種の神器の内面的意義は、既に筑紫の五十迹手が、鏡・劔・玉を掛けた五百枝の賢木を船頭に立て、仲哀天皇を奉迎した時の記事で明にされてゐるが、徳目としては、まだよく分つてゐなかつた。吉野朝頃に成つて初めて之を佛教のカテゴリーに

當箴めて説くものを生じ、次には陰陽五行、日月星、天地人等に當てられ、最も多くは之を智仁勇の三達徳に配當して説いたが、是等は何れも外來思想である。そこで宣長翁は、三種の神器は神器其のものとして尊いのである。漢意に當箴めて彼是論するのは無用であるとして、全部之を抹殺した。これは實に痛快な議論であつて、私も賛成である。

次は國體論の高調である。宣長翁は我が日本の國體に絶對値を認めて、支那では人の國を暴力を以て奪ひ、又、欺いて取つたものが聖主であるとされてゐるが、斯かる惡風を肯定する所謂聖人なる者が、忠を説くといふ事は不徹底であると、頗る深刻な批判を與へてゐる。

又、次には孝を論じて、和漢の孝を比較し、支那の孝は消極的であるが、日本のは積極的である。支那では「天命ニ安ンズル」のを善い事にしてゐるが、日本では其家の「衰へたるをも憂へず……いはゆる命なりとして安んじ居らむは先祖へ不孝のいたり」である。「不義を行ひて富貴をもとめむこそあしからめ、及ぶべきかぎりは、力をつくして身をも榮やし家をも起さむこそ父母先祖への孝」であるとして「然るを天命に安んずといふをいみじき事にして、父母先祖へ不孝になることを顧みず、只管己が潔白なる名をのみ貪る漢國人の議論は、いとくうるさき事」であると排斥してゐる。

斯くは云ふものゝ翁は決して外國の事を學ぶなとは云はなかつた。外國の事を知るのも必要であるが

先づ日本の事を根本にせよと云はれたのである。日本人であり乍ら日本語を顧みず、唐囀りを得意がつた時代に、日本語及び日本の學問を尊重すべきことを力説されたのである。

其の他、翁の主張の中で、特に注意すべきは、尙古の思想と進歩主義との調和を取られた事である。翁は惟神の道に絶對値を認めて熱烈に古學を高調してゐるにも拘らず、一方では時世の進歩を認めて、「古よりも、後世のまされること、萬の物にも、事にもあほし」といひ、同時に又、學問の上にも進歩を尊重して、「師の説になづまざる事」の要を説き、「よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道には、いふかひなきわざ」である。苟くも反對説があれば、憚らず之を發表することが師意を擴める所以であるとして、自らも其の師眞淵翁と反對の立場から主張することに躊躇しなかつた。

由來外國文化の行き方は革命的創造を主調とするが、我が日本人のそれは常に維新的創造である。革命は傳統を根本から引つくり返すのであるが、維新は祖先以來の傳統の基礎に立つて改良發展を加へて行かうといふにある。これは實に世界に稀なる國風であつて、例へば明治維新の如きも、其の根本主調は、復古即ち建國の精神に立返つて新進みをする事であつた。本居翁が、其の學問上に於て、飽くまでも傳へられた師意を繼ぎ乍ら、而も形になづまず敢然と新見解を採つて進むことを説いたのは、祖孫一體の國風と正に相一致する學風として注意に値する。此の學風を紹いで進むならば、日本は永久に老

いず、過去の歴史と一體に聯繫を保ちつゝ若々しい生命を以て躍動することが出来るのである。

只惜いことに、此の學風の主張者であつた本居翁は、外來思想の汚染を去つて日本固有の道徳意識の上に新なる進みを爲すべきことを主張したゞけで、其の組織系統を示さず物故された。そこで道徳としては、之を徳目概念に仕上げるところまで行かねば眞の健全なる發展は出来ないのであるから、後の何人かゞ立つて、其處に新なる建設をしなければ成らなかつた。ところが誰もそれを徹底して行つた後繼者はなかつた。大國隆正あたりが、幾らか教權的なものに仕上げたが、それはまだ不徹底であつた。徳目を儒教に取りつゝ、而も全然日本的解釋の上に立つて、祖宗の遺訓、古來の遺風として、一の道徳的教訓に仕上げられたのは、教育勅語であると思ふ。此の勅語こそは宣長が主張した日本の傳統の上に美しい時代的新彩を以て鮮明に現された國民道徳の徳目であつて、此の勅語の精神は萬古を貫いて永久に渝るべからざるものである。

近來は西洋の思想が入つて、西洋流の實踐道徳體系の解釋に依らねば道徳としての權威がないやうに考へる迷謬論者は、凡てを西洋流のカテゴリーに當嵌めて、日本を洋化せんとしてゐるが、我々は宣長の志を紹いで飽くまでも傳統精神の基礎の上に立ちつゝ、更に新なる發展を爲さしめることが必要であると思ふ。（澁日生要領筆記、文實在筆記者）